アンプティーサッカーとともに生きる

「障害の壁を越えて交流できることは、本当に大きいスタートではないかと思います。」

アンプティサッカー（上肢または下肢を切断した障害をもつ選手がプレーするサッカー競技）の普及活動に取り組む、古城暁博さんはこう語る。自身もサッカー選手として活躍している古城さんには、右足のひざから下がない。

一九八三年に沖縄県で生まれた古城さんは、五歳の時に交通事故で右ひざから下を切断する手術を受けた。右足を失ってしまった時のことは、よく覚えていないという。小学校時代の古城さんは、右足のハンディを少しも気にせず、いつも友達と義足で歩き回っていたそうだ。

そんなあるとき、古城さんはサッカーと出会う。サッカー部に入部し、同級生と比べて大きな身体を生かしてディフェンダーとして活躍するようになっ

ていった。当時、Ｊリーグが開幕したこともあり、「将来は日本代表になってワールドカップに出たい。」古城さんは、次第にそんな夢を持つようになっていった。古城さんは、中学校でもプレーを続け、将来は日本代表としての活躍を期待する声も挙がるようになっていった。

しかし、高校生になった古城さんを待ち受けていたのは、大きな「壁」だった。大会の規定が厳しくなり、義足で公式戦に出場することができなくなってしまったのである。古城さんの生活は一変した。Ｊリーグで活躍するプロ選手たち、今まで一緒にプレーしていた仲間たちの姿をみるたび、将来への不安や絶望を感じ、目の前が真っ暗になった。自分の進むべき道が見えなくなっていった。そして、ついには大好きだったサッカーと距離を置く生活を送ることになる。

絶望の中、宮古島から千葉に引っ越した古城さんは、新たなスポーツと出会

う。それが、アンプティサッカーである。その出会いは衝撃的であった。

「ボールを蹴る前に、杖をついて歩くので精一杯。そのとき、自分が初めてサッカーをやるような感覚に戻り、『またゼロからサッカーをスタートできるな』と思いました。」

絶望を味わった古城さんに、新たな希望がわいてきた。

古城さんは現在、アンプティサッカーの普及活動にも積極的に参加している。デモンストレーションを行うと、毎回驚きの声が挙がるという。

「片足で立っている体制で走ること、その体制でボールをけることがどのくらい大変なのかっていうことで、みなさん驚かれます。」

周囲の驚きの声や笑顔が、古城さんの進むべき道を照らしてくれた。

「パラリンピックになっていない競技も本当にたくさんありますし、それを知っていただきたい。ただ、知ってもらうからには、私たち障害者が、健常者の社会の中にどんどん入って、関わりをもっていかなければ。」

古城さんの視線の先には、二〇二〇年の東京パラリンピックがある。古城さんの生き方は、これからもたくさんの人々の道を照らし続けるだろう。